

2026.3.23

報道関係者 各位

< 配信枚数 3 枚 >

国内最大級の宇宙系大学院誕生へ
大学院「宇宙地球フロンティア研究科（仮称）」設置構想を発表
2028 年 4 月開設予定

立命館大学（所在地：京都府京都市、学長：仲谷善雄）は、本日、2028 年 4 月に開設を予定する大学院「宇宙地球フロンティア研究科（仮称）」の設置構想を発表しました。



本学では、これまでに宇宙地球探査研究センター（通称「ESEC」）を中心とした研究推進や、学部・研究科横断型の宇宙マネジメントに関わる教育プログラムなどを通じて、宇宙探査・衛星データ活用・宇宙ビジネスなど多領域にまたがる次世代研究の基盤整備を進めてまいりました。

本研究科では、宇宙と地球のフロンティア領域を対象に、理学・工学・マネジメントを横断する教育を実施します。また、国内で初めて研究科の名称に「宇宙」を冠し（立命館大学調べ）、国内最大級の宇宙に関する高度専門人材育成を行う大学院として、未来の宇宙探査・開発を担う高度専門人材の育成を目指します。なお、本研究科の設置計画は予定であり、今後、内容に変更が生じる可能性があります。

世界の宇宙ビジネス市場は、2035 年に向けて現在の約 3 倍規模へと成長することが見込まれています。衛星やロケットといった基盤技術に加え、衛星データを活用した新たなサービス領域が急速に拡大し、宇宙産業は構造変革の真っただ中にあります。こうした世界的な潮流とは対照的に、国内では市場拡大に対応できる専門人材の育成が追い付かず、深刻な人材不足が顕在化しています。

立命館大学は、この社会的要請を受け止め、宇宙分野の教育研究基盤をさらに強化すべく、新たな大学院教育の整備に踏み出しました。

■仲谷善雄 立命館大学学長 コメント

立命館は、進展する宇宙利用時代に応えるため、新研究科の設置を通じて分野横断的な知と人材育成を推進します。社会の期待に応える大学として、持続的な価値創出に資する教育研究を着実に進めるとともに、未来社会を支える学術基盤の発展にも寄与してまいります。

■中須賀真一 研究科長（就任予定）コメント

宇宙分野は現在、研究から産業へと大きく転換する局面にあり、分野横断的な知を統合しながら、実際のプロジェクトを推進できる人材が強く求められています。本研究科では、実際の宇宙ミッションや探査プロジェクトを基盤とした教育を通じて、構想から実装までを担う力を養い、宇宙開発・利用の現場を支える人材の育成に取り組んでまいります。

本リリースの配布先：京都大学記者クラブ、草津市政記者クラブ、大阪科学・大学記者クラブ、
文部科学記者会、科学記者会、経済産業記者会

●取材・内容についてのお問い合わせ先

立命館大学広報課 担当：中嶋 TEL. 075-813-8300 Email. r-koho@st.ritsumeai.ac.jp

別紙

■立命館大学 大学院「宇宙地球フロンティア研究科(仮称)」設置構想基礎情報

名称	宇宙地球フロンティア研究科 Graduate School of Frontier Exploration in Earth and Space
設置年度	2028年4月
キャンパス	びわこ・くさつキャンパス(滋賀県草津市)
入学定員	博士課程前期課程 100名 / 博士課程後期課程 15~20名
研究・教学領域	宇宙地球探査科学(理学) / 宇宙地球探査技術(工学) / イノベーション・マネジメント
使用言語	英語ベース(英語・日本語ハイブリッド)
教員数	約15~20名
その他	留学生比率約半数を想定

2. 設置の狙い

宇宙探査・開発のフェーズが「調査」から「利用・開発」へと移行する中、地球・月・火星およびシスルナ空間のフロンティア領域を対象に、探査・開発を推進できる高度専門人材の需要が急速に高まっています。探査計画立案、人工衛星・探査機の開発、衛星・探査データの利活用、極限環境科学、宇宙ビジネスや制度など、多領域を複合的に理解し、プロジェクトを牽引できる“総合力・横断力を備えた人材”が求められています。立命館大学は、理学・工学・マネジメントの総合知を統合し、産業界・研究機関・国際プロジェクトで活躍する人材育成を目指します。

3. 特徴

- ・理学×工学×マネジメントの“横断型”大学院
理学や工学の細分化された専門分野単位の教育課程ではなく、理学・工学・マネジメント横断のカリキュラムを採用
- ・対象領域のスコープが広い(月 / 火星 / シスルナ空間 / 地球)
宇宙利用時代を見据え、探査・開発からデータ利活用まで涵養する教育研究を実施
- ・立命館大学宇宙地球探査研究センター(ESEC)と密接に連携
宇宙戦略基金(第1・第2期)に採択されたESECと密接に連携し、最先端の研究成果や施設・設備、そして人材育成ノウハウを宇宙地球フロンティア研究科の教育に活用
- ・月・火星面を再現したワンストップの実験環境
月・火星の「ダスティな環境」を再現する装置群やクリーンルームなど、国内でも稀な研究環境を整備
- ・プロジェクトベース学習(PBL)を構想
ハンズオンのプロジェクト型教育をカリキュラムの柱に据え、現場実装力・統合力を養成
- ・データ駆動(リモートセンシング×シミュレーション)
ハードウェア開発だけでなく、人工衛星・探査データの利活用と価値化も重視
- ・外国人留学生と共に学ぶ国際プロジェクトを想定した学修環境を整備
留学生を半程度受け入れ、多文化協働を前提とした環境で、実践的な英語力とチーム力を育成
- ・起業・事業化まで見据えたビジネス創出
アントレ / イントレプレナーシップを教育に組み込み、研究成果の社会実装・事業化を支援。
- ・社会実装の横展開(宇宙⇄地球の相互応用)
宇宙技術を防災・環境など地球課題へ展開し、多様な産業への進路を拓く教育を実施

4. 着任予定教員のプロフィール

国際的な宇宙探査・開発プロジェクトおよび世界の超小型人工衛星分野をリードする教員が着任予定。

氏名	現所属・職位等	経歴
 <p>中須賀 真一</p>	<p>東京大学工学系研究科・教授（2026年4月より総合科学技術研究機構・教授）、宇宙地球フロンティア研究科・研究科長（就任予定）</p>	<p>超小型人工衛星研究の先駆者として知られる工学者。東京大学工学部航空学科を卒業後、同大学院博士課程を修了し工学博士を取得。その後、日本アイ・ビー・エム東京基礎研究所で人工知能研究に携わったのち、1990年に東京大学へ着任し、講師・助教授を経て2004年に教授へ就任。</p> <p>世界初のCubeSatを含む多数の超小型人工衛星の開発・打ち上げを成功させ、日本の超小型衛星技術を国際水準へ押し上げた。また、研究成果の社会実装にも積極的で、宇宙ベンチャー数社の立ち上げに貢献し、研究室からは超小型人工衛星バスを開発するアークエッジ・スペースなどの企業が複数誕生している。政府の宇宙政策委員会委員などを歴任し、産官学を横断して日本の宇宙産業基盤の構築に大きな役割を果たしている。</p>
 <p>佐伯 和人</p>	<p>立命館大学総合科学技術研究機構・教授、立命館大学宇宙地球探査研究センター（ESEC）・センター長</p>	<p>立命館大学宇宙地球探査研究センター（ESEC）センター長を務める惑星地質学者。東京大学大学院理学系研究科で博士（理学）を取得後、フランス・ブレイズパスカル大学研究員、秋田大学助手・講師、大阪大学准教授を経て現職に至る。</p> <p>専門は惑星地質学・鉱物学・火山学で、JAXA 月探査「かぐや」プロジェクトに参加し、近年は小型月着陸実証機 SLIM 搭載マルチバンド分光カメラの開発リーダー、さらに月極域探査機 LUPEX 計画の近赤外画像分光カメラ開発リーダーを務めるなど、将来の月探査を牽引する研究者。2025年1月に採択された宇宙戦略基金第1期「SX 研究開発拠点」の研究代表者を務める。</p>
 <p>小林 泰三</p>	<p>立命館大学理工学部・教授、立命館大学宇宙地球探査研究センター（ESEC）・副センター長</p>	<p>地盤工学・テラメカニクス・月惑星探査の専門家。1998年に立命館大学理工学部土木工学科を卒業後、同大学院で環境社会工学専攻・総合理工学専攻を修了し、2003年に博士号を取得。九州大学助教、福井大学准教授、コロラド鉱山大学客員研究員を経て2017年より現職に就任。</p> <p>研究は地盤センシング技術、防災・維持管理、情報化施工に加えて、月・惑星地盤調査システムの開発や探査ローバー走行性評価など宇宙工学分野にも広がっている。2025年10月に採択された宇宙戦略基金事業（第二期）「月面インフラ構築に資する要素技術」の研究代表者を務める。</p>
 <p>長岡 央</p>	<p>立命館大学総合科学技術研究機構・准教授、立命館大学宇宙地球探査研究センター（ESEC）・メンバー</p>	<p>月探査・惑星科学を専門とする研究者。早稲田大学で物理学を学び、博士課程修了後、JAXA 宇宙科学研究所の特別研究員、理化学研究所研究員、会津大学特任准教授などを経て、2023年に現職へ着任。研究テーマは、月や小惑星に残された初期太陽系の記録を読み解くための元素・鉱物組成分析、リターンサンプル研究、さらに惑星探査機に搭載される X 線・中性子観測装置の開発など多岐にわたる。月面水資源探査のための中性子観測計画「MoMoTarO」、月隕石や回収サンプル分析による母天体形成過程の研究、月全球地質図の作成プロジェクトなど、多数の月探査関連プロジェクトに参画。観測装置開発から分析・理論研究まで幅広く手がけ、日本の月探査科学を支える気鋭の研究者である。</p>
 <p>仲内 悠祐</p>	<p>立命館大学総合科学技術研究機構・准教授、立命館大学宇宙地球探査研究センター（ESEC）・メンバー</p>	<p>惑星探査と宇宙風化作用を専門とする研究者。東京理科大学で物理学を学んだ後、総合研究大学院大学・宇宙科学専攻で博士課程を修了し、JAXA「SLIM」プロジェクトの研究開発員として月着陸探査に関わった経歴をもつ。月・小惑星における太陽風起源の水生成メカニズムの解明や、月極域探査 LUPEX 計画用可視近赤外分光カメラ（ALIS）の開発など、観測装置開発と実験的惑星科学の両面から研究を推進している。</p> <p>2023年より立命館大学に着任し、月の資源探査や宇宙風化研究を通じて太陽系小天体の理解を深める先端研究を牽引している。</p>